
災後と復興、学芸員課程から博物館の役割を 考える

—熊本地震の後、博物館が人々の心にどう関与したかを考える—

After disaster and restoration, think about the role of the museum from curator training course.

—Thinking about how the museum participated in people's mind after the Kumamoto earthquake. —

山内 利秋

Toshiaki, Yamauchi

Abstract

The exhibition at the museum practice in 2018 was the theme "Restoration of the mind". This theme is hard to make form, but the students challenged boldly. Particular attention was given to students, mainly on their own human relations, to collect information at the time of disaster and subsequent information. As a result, it became an exhibition that makes visitors deeply imagine "What the restoration was".

キーワード

博物館・博物館学・学芸員養成・災害・熊本地震・防災教育

1: はじめに

平成 28(2016) 年 4 月に発生した熊本地震は、被害の大きかった熊本県の隣にある宮崎県の北部に所在する九州保健福祉大学の学生達にも大きな衝撃や不安を与えた。2 年が経過した平成 30(2018) 年において、彼ら彼女らにとってすでにこの災害は「過去の存在」であり、一方、次から次へと発生する自然災害に対しての身近な先行例としても受け止められていた。

大規模災害の発生を前提とした社会を博物館学教育の中で取り上げ、特に博物館学内実習において企画展示として実践していくようになって 3 年度目となった。過去、受講生達は災害から「逃げる」・「避難する」というそれぞれのテーマでの展示を企画してきた(山内 2017,p.23-56・2018,p.49-60)。これら先行事例を踏まえ、平成 30 年度は「心の復興」という、形にし難く、しかも将来的な見通しの構築が難しいテーマを取り上げる事となった。このテーマについて受講生らはどのように学修し、具体

的な展示に結び付け、自分達で評価していったかについて述べてみたい。

注視したいのは熊本での災害時に生じた人々の心の不安に対して博物館が果たした役割について注目し、さらに東日本大震災被災地の現状を理解しようとする事によって将来の復興についての現状をより正確に把握しようとする姿勢が強い一方で、それを伝えるためのデザイン的思考については、過年に蓄積されていた先輩からの展示技術の継承が行われた点である。かつての大学教育とは異なり、研究室単位でのゼミ活動でもない資格取得課程のような教科教育においては、先輩―後輩という関係性の構築が難しい。従って前年度・前々年度からテーマを継承した企画を行っても後年度へのフィードバックが上手く行えない欠点があった。今年度についてはそれが上手く消化された企画展示となった点が大きい。

2:3 年目に。

熊本地震から2年を経た平成30年4月の時点で、平成28年当時の災害時の混乱の記憶が各自どれだけ残っているかという事を、博物館実習受講生(本学では4年次生)に問うた。すでにクローズなSNS(それゆえに災害時にも身近な情報交換が行われていたと考えられる)である"LINE"に打ち込まれたはずの家族や身近な友人とのやりとりは彼ら彼女らのスマートフォンからは消去されており、個人的に記録でも付けていない限りは本人達自身の頭の片隅の記憶を辿るしかない。これら記憶はもはや断片的になってはいるが、共通の話題としての「あの時は…」という友人達との会話の交差によって、記憶と記憶がもう一度接続してくる。曖昧な映像として遺存していた記憶を言葉にしていけるかどうかは個人によって差はあるものの、こうして自分達の2年前を思い起こす所から、今年度の企画は始まった。

平成30年度の受講生達にとっては、昨年度・一昨年度に同じような企画展示を行った先輩達の姿が良くも悪しくも先行例として映っており、自分達の活動を再確認する手段にもなっていた。すなわち、「復興」というキーワードは、平成28年度の災害からいかに逃げるかをテーマとした展示、29年度の避難所と避難生活をテーマとした展示との連続性を考えた場合、すんなりと行き着いたテーマを構成していくものではあった。しかし、そもそも「復興」とは何か?東日本大震災どころか、阪神淡路大震災の事例を考えてみても、本当の意味での復興とは何を意味しているのかを理解するのに困難が伴う。被災地の内と外での理解のギャップはもとより被災者一人一人にとっても認識が異なっているはずのこの概念を、受講生にとっての理解の中で他者に対して具体的な展示として提示できるレベルにまで持っていくには、受講生なりの情報と概念の統合化に相当な集中力が必要となると予想された。教員にとっても、情報とアドバイスを示唆する難しさがあったのは、何と言っても「何をもって復興とするのか」という答えが極めて見にくい点に他ならなかった。少なくとも熊本地震被災地に対して単純なハードの再整備を復興と捉えてほしくないという意識だけはあったので、東日本大震災被災地を先行例として頭に入れる必要性は強調した。

今年度の受講生が一つのヒントとして理解したのは、一学年上の卒業生の卒業研究であった。熊本県出身のこの卒業生が卒論テーマに選んでいたのは、被災後における博物館や図書館が果たした役割である。熊本地震ではいくつかの博物館や図書館が、被災直後からしばらく経過した時点における、被災者の心のストレスの問題にアプ

ローチしていた。被災者は避難所生活など不自由な暮らしをおくるうちにストレスの蓄積が大きくなる。特に子供は大人よりもストレス耐性が弱く、結果的にこの負担は母親など周辺の大人達にも連鎖してしまうケースが多い。そこで教育普及に力を入れており、なおかつ避難所運営や文化財レスキューに直接関与しなかった館園とその職員は、こうした問題へのアプローチを行っている。この熊本出身の卒業生が卒業研究で扱ったのはまだ地震から1年半前後の時期であり、どこの館園でも地震以後の様々な行動をうまく整理出来ていなかったものの、この時期だからこそその必要な記録活動であり、大規模災害時における生涯学習施設の役割を検討していく材料にもなるとの理解のもと、博物館・図書館それぞれ1館ではあったが職員に直接的なインタビューを行っている(註1)。

この1つ上の学年である29年度卒業生の卒論から30年度を受講生が理解したのは被災者の心に対するアプローチであり、「心の復興」こそが扱うべきテーマであると合意していった。この結果タイトルは『震災から心彩へ—私たちの心の復興—』となった(図1)。

3: 企画展示

受講生達の議論の末、今年度の企画にはできるだけ熊本地震被災地やいくつかの災害の生の声、リアルな情報を反映させたいという希望が持たれた。こうした観点から行なわれたのが被災した館園へ実際に取材へ行き、災害前後における職員の対応についての説明を受けて映像記録を撮る事であったり、個人的に交流のある被災者にあらためて災害時の話を聞くという活動であった。被災館園として実習生がうかがったのが熊本市現代美術館と熊本市動植物園である。この2つの施設には、過去本学から博物館学外実習で参加している。後者は平成30年度も館園実習に本学から参加する事となっていたが、この実習も地震後2年が経過してようやく受け入れが可能となったものであった。

この活動の後、さらに受講生は被災した自分達の友人・知人に対して独自に情報提供を依頼し、地震直後とその後の様々な状況についての聞き取りを行い、写真等も提供してもらっている。こうした結果も展示に反映されていった。これら「聴く」という行為を展示表現化するにあたっては、今回はいくつかの方法が採用された。

「パネルに文章としてまとめる」

熊本市現代美術館の活動については、インタビュー内容を要約して2枚のパネルにまとめるという極めてスタンダードな方法を使った(図2)。被災

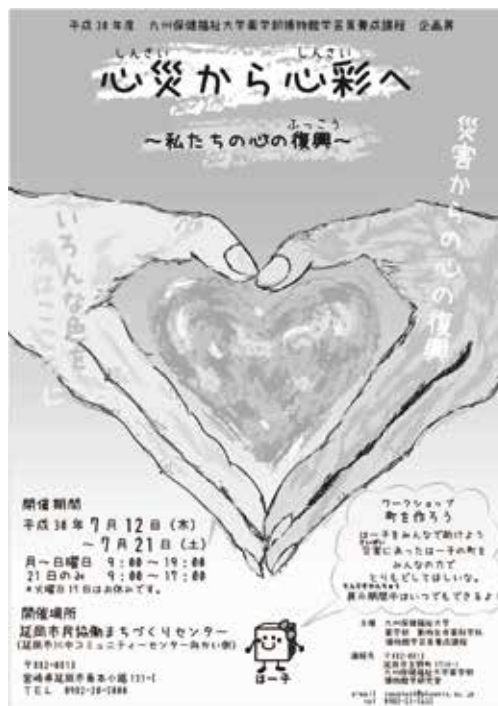


図1: 平成30年度企画展示ポスター

地震後の熊本市現代美術館

震災後、演奏会や熊本城のミニチュア作成といったイベントを行なった。職員も日常生活をともに送ることができなかった時期もあったが、自分たちの被災状況を基準にしながらイベントの選択や計画を行おこなった。また、震災後フリースペースとして施設を開放したが、ゴールデンウィークや夏休み時期であるにもかかわらず、近隣の多くの施設が閉まっていたために、この場所の存在は大きく、幅広い年齢層の方が訪れていた。

来館者の方々から職員へ話しかけてくれることもあり、会話が増えた。来館者のストレスを解消する場として利用してもらうことができたのではないかと考えている。

そしてこの館にて熊本地震記録の作成をした際には来館者の方から感謝の言葉ももらい、自分たちの心のケアになったと気づいた。人間は役に立ちたいと思う動物であるから、何もできないことがもどかしく、感謝されることに感謝したのだと語った。

現代美術館が感じたこと

地震が起きた形跡が町から消えても、被災した人の心の中には残ることを知っていてほしい。いろんなものがそろっている世の中で、それがなくなった時になにが必要なのかが見えてくる。

避難所のように常に話しかけたり、何かしなくては、とビリビリした空間での生活をする中で、美術館のフリースペースのように不特定多数の知らない人が集まり、話しかける必要はないが、例えば地震が起きたときに「今ゆれましたね。」と言えるような場所が当時必要であり、このような場所や存在が人々の安心につながるのではないかと思った。

復興とは、いつか終わるものではないため、いかに日常生活を送ることができるかが大切であり、熊本地震の際のこの美術館のように安心できる場所、施設を開放してほしい。

平成 30(2018)年 6月 21日、熊本市現代美術館にて。

同館職員の岩崎千夏さん、岡田直幸さんへのインタビューより。

図 2: 熊本市現代美術館へのインタビュー内容パネル (上・下)

時における同館の活動は一部で紹介され、館自身によっても記録集としてまとめられている(坂本他編 2018)。そこで実践された活動の中で着目出来る点の一つとして挙げられるのは、被災者の心の問題への対応であった(そして同様の活動は熊本のいくつかの博物館や図書館でも行われている)。確実なのは現代の博物館に最も希求され、そして重要な課題として位置付けられるインクルーシブな活動を端的に示したものであったと言えるだろう。また、自治体直営館では難しい被災時の活動が指定管理館では可能であったという点などは、今後の大規模災害時における博物館の活動にとって示唆を与えるものであった。

企画展では視覚的な情報よりも被災時の同館の行動をシンプルに紹介しつつ、災害時における活動の意義や博物館の持つ新たな役割について考えていく事を目指している。展示ではこの館が発行した冊子の内容を上回るものではないものの、職員に直接

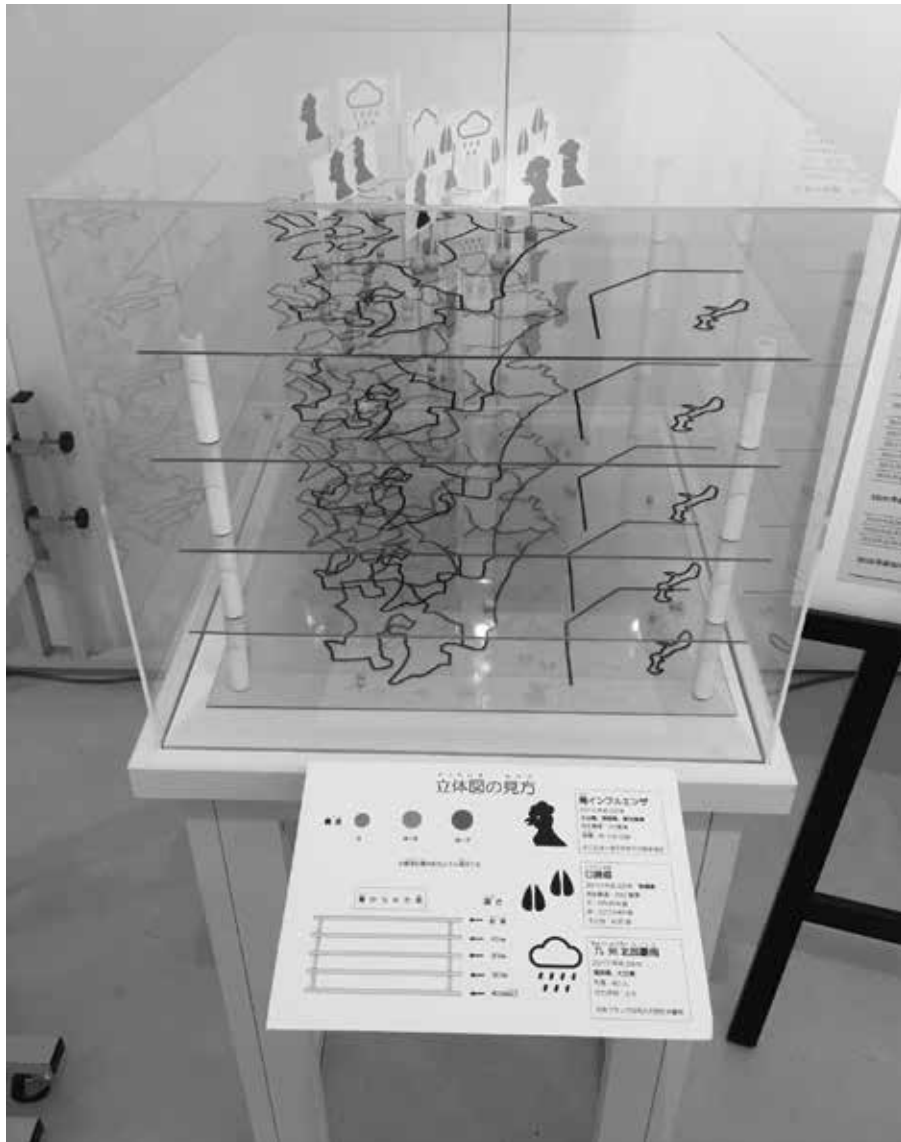


写真 1: 立体化した九州の災害。最も上層では豪雨水害や疫病を、下層では地震の各震源が表されている。内陸の地震に比べ、太平洋側のプレート地震の震源が極めて深い所にあるのがよくわかる。

確認した地震当時のリアルな施設の状況を受講生が理解していった。そして受講生の理解は、後で紹介する障子を使ったインスタレーションとして「作品化」されていた。

「九州での災害」

アクリル板を層状に重ね、九州エリアの輪郭を描き、各レイヤーで発生した災害分布を立体化して表現した(写真 1)。地上で発生した災害には豪雨水害のみならず、口蹄疫・鳥インフルエンザといった畜産業の盛んな九州の特徴が表れている。

活断層地震である熊本地震分布域に比べ、海溝型プレート地震である南海トラフ・日向灘地震の発生は圧倒的に深い震源域である事がとてもよく理解出来る。この展示は宮崎県総合博物館の自然史展示にある日向灘地震の展示が参考にされていると言う。



写真:2 映像展示。壁面角に映写する事で、立体感を演出している。

「熊本市動植物園に関わる映像+パネル」

熊本市動植物園は地震によって大きな被害を被った施設であった。そしてその被害は施設・設備のみならず、被災時に飛び交った「不確かな情報」による影響もあり、歴史的教訓ともなる側面が強い。

実習生達が職員から話を聞き、展示に活用したエピソードとして重要だったのは、地震被災直後に「動物園からライオンが逃げた」というデマがツイッターにおいて流れ・拡散された事によって発生した問題として何よりも大きいのが、地震で職員や動物の状況確認が急がれる中、さらに園への情報アクセスが増大した結果サーバがパンクし、このデマ情報を確認出来なかつたりメール等がやりとり出来ない点であった。何よりも「デマ」が誤りである旨の情報を動物園として発信出来ないために、混乱が拡大してしまった点にあるし、職員もデマ流布の存在を知ったのは、個人のスマートフォンで確認した SNS において他の動物園の職員からの教えてもらったからであったと述べている。

関東大震災以来、近代以降の大規模災害時においてデマ情報が拡散して重大な事件が生じたのはよく知られているが、この問題は今日の社会においても災害時における本質的な課題として残っている。また、スマートフォンやソーシャルメディアの普及度が高くなったという意味において、熊本地震でのこの象徴的な出来事は、東日本大震災時よりもさらに深刻化した状況を生じさせやすかったと言えるのかもしれない。熊本地震において、人々は「ライオンが逃げた」というデマを単に無意識に拡散したのではなく、ある出来事に関わる情報が信頼できるかどうかを確認しようとした事によって、結果的に当該施設の混乱を拡大させてしまった。これはフェイクニュースが拡散する今日、安全確認のためであれ興味本位であれ、「検索」が情報の正確さの確認に関わる行為として当然となった現在において、人々の獲得したりテラシーが既存のインフラストラクチャーに対して発生させる溢流でもある。

こうした被災当時から、復旧途上にある動物園の状況は映像展示によって表現された(写真2)。立ち入りの制限された園内各所にも、動物達は暮らし、飼育・運営に関わる人々がいる。被災し修理途上の施設を職員に案内されながら、被災直後と現状を説明するテロップを付けた約3分間×2本の映像作品となった。

また、同動植物園が復興支援活動として実施した「ふれあい動物園」、そしてこの活動から職員が理解した「心の復興」についても紹介した。

「人型シルエットと災害発生時の課題」

平成 29 年度のテーマである避難所の課題を引き継いだ展示として、コの字状に囲んだパネルの中に人型のシルエットを吊るし、それぞれのキャプションに被災地で発生する様々な問題を取り上げた(写真 3)。細かい説明は省き、シンプルな人型のシルエットとともに閉鎖型の狭い空間に提示した事によって、なんとも重苦しい状況を再現していたのであった。29 年度の展示では、オリジナリティの高い人物のイラスト(当時の企画展ポスターに使用した避難所の人物像)と吹き出しを吊り下げるといった展示表現を行なったが、30 年度はこれにヒントを得たものである。個々の人型のパネルには「性被害」「失業」「アルコール中毒」といった、被災後の人々の間で起こり得るショッキングなキーワードが荒いマジックの文字で書かれ、その下にキーワードの解説が記載された。



写真 3: 人型シルエットと被災地の課題

「コ」の字状の半閉鎖空間が効果的に使用され、観る者に対して得も言われぬ重苦しさを与えていた(上)。

個々のシルエットには「性被害」「失業」といった被災地避難所や被災者が抱える重い課題がキーワードとして記載されている。特に女性に関わる問題は平成 29 年度展示から引き継いでいる。



写真 4: 障子に貼られた被災地・被災者の言葉

「障子を活用した災害時の被災地・被災者の言葉インスタレーション」

被災地の博物館からの情報や、受講生が被災した友人・家族等からプライベートで接した中で出てきた会話の言葉や理解したキーワードを展示として表現した。この方法として古建築で活用されていた障子を使用した(写真4)。この障子は被災地のものを使っている訳ではないが、一定の土地に存在した建築建具の持つ歴史性は、あたかも被災地とそこで生活を営んできた人々との関係をイメージさせる対象として相応しい。

2枚の障子を並べ、棧の所々に「一刻も早く家に戻りたかった」「日常生活を送りたい」「死ぬならここで死ぬ」「動物園を再開したら何をしよう」「一度地震を経験したら、そこから抜けられない、前には戻れない」といった言葉が貼られ、これらが被災地・被災者の心の奥から出てくる言葉である事が理解されるように構成した。

「水没した写真・焼けた写真」

写真を遺す事は、災害に遭った人々の心の問題と直結している。住み慣れてきた土地や、家族・コミュニティとのつながりが途切れかけた状況においては、心のケアが極めて重要になる。特にこの喪失感は被災直後よりも数カ月を経た以降に大きくなって様々な問題に拡大していく。東日本大震災で「思い出の品」を拾い集める多くの人々の姿が象徴的であったが、その中でも写真は失いかけた「心のつながり」をもう一度回復させていく可能性がある。筆者自身この課題に平成17(2005)年に発生した台風14号被害の時から関わっており、平成30年には西日本豪雨水害によって大きな被害のあった愛媛県において写真救済のワークショップを行なっている(註2)。このブースを担当した受講生は写真の保全作業に参加しており、「写真を遺す事」の重要性を大変深く認識していた。



写真 5: 被災した写真

平成 17(2005)年に延岡市に大きな被害をもたらした台風 14 号による水害で水没した写真。10 年以上経過した現在でも臭いが残る (左)。

火災により焼失した家屋から保全された写真。中心の黒い塊は写真の束で、表面は炭化しているが、処理する事によって中の画像を救出出来るケースも多い (右)。

今回はこの平成 17 年台風 14 号で被害を被った写真を直接触れ、河川から溢れた汚水を被った写真が 10 年以上経った現在でもその臭いが抜けきれていない事を理解してもらえるように、ハンズオンタイプの展示とした。さらに宮崎県内で火災によって被害を受けた市民の写真も展示した (写真 5)。

「被災地の今」

受講生自身によって撮影された東日本大震災被災地の平成 29 年の状況・受講生の友人とその家族が撮影した平成 27 年の被災直後の熊本県益城町の状況について、それぞれ記録撮影した写真を並べて展示した (写真 6)。また、別の受講生が熊本に在学中の友人との会話の中で聞いた、災害時の熊本市内の様子を短く文章化して展示してみた。

益城町の状況は市民生活の視点から捉えられたものであり、被災者の前震後・本震後の自宅や商店街の様子が記録されていた。宮城県では平成 29 年 9 月に「和牛のオリンピック」と言われる全国和牛能力共進会が開催された。実家が畜産家であり、自らもそうした進路を希望している受講生がこの品評会の見学に行き、同時に東北被災地 (仙台・女川・石巻) の状況を自分の眼と耳と足でまわり、記録・表現していた。2 か所の異なった土地でありながら、時間的経過による復興状況を提示する事で、被災地の未来への希望を表現している。

また、受講生による友人との対話から書かれた文章からは、短いながらも地震後に情報が錯綜し、確認しないまま SNS に頼っていた人々の様子がわかり、先の動植物園でのデマ情報の拡散とも大きく関わってくる。

「東日本大震災被災地、第 1 次産業の回復」

復興とは何かという根源的な問いを考えていく上で、阪神淡路大震災や東日本大震災被災地の現状と課題を理解する事が極めて重要である。特に東北被災地は少子高齢・人口減少社会を震災によって先取りしてしまった等とも言われる場合があり、実に厳しい状況がある。首都圏・近畿圏といった大規模人口圏から離れた東北地方と九州地



写真 6: 東日本大震災被災地 (平成 29 年) と熊本地震被災地 (平成 27 年)

方とは、地方の現状と課題を考える上で共通する側面あると言えるのかもしれない。

産業の復興、特に第 1 次産業の復興は、災後の地方社会の近未来の指針となるべき側面が強い。そうした観点から、水産業・農業に関わる展示を行った。パネルとして展示した東北各県の水産業を漁獲高から確認すると (平成 18 ~ 27 年)、宮城・岩手の両県では被災直後に激減し、それから幾分持ち直したものの厳しい減少傾向にあった (図 3)。福島県も両県程ではないにせよ同様の傾向がうかがえる。このような厳しい状況においては、加工・販売までをも含めた 6 次産業化の過程で、クラウドファンディングによる資金調達や洗練されたデザインによるパッケージングといった現代的な戦略に生き残りのための一つの可能性が求められている。

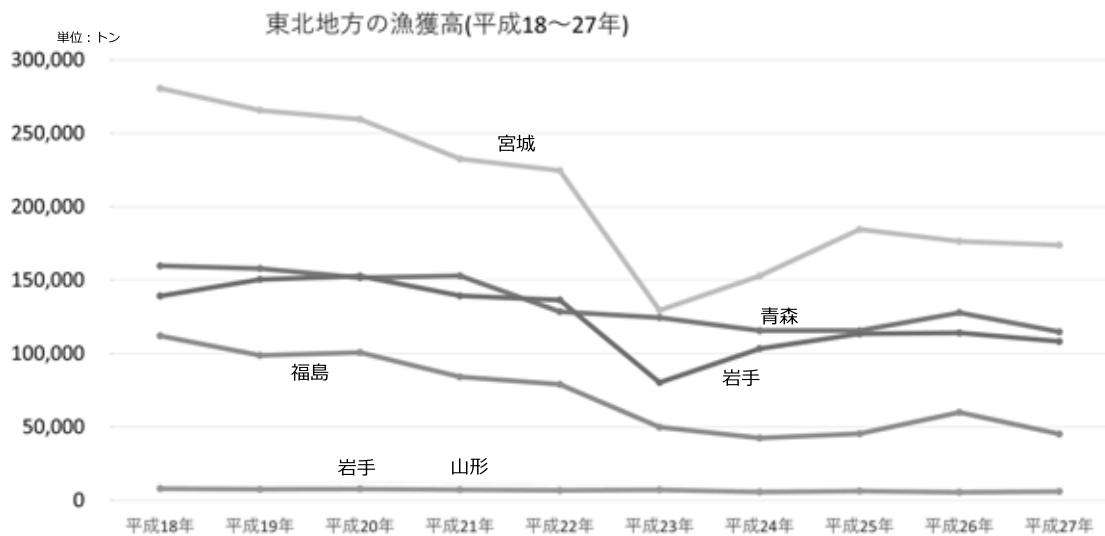


図 3: 東北地方の漁獲高 (平成 18 ~ 27 年)

東北農政局『平成 27 年海面漁業・養殖業生産統計 (東北)』より作成



写真7:岩手県産「Ça va?(サヴァ)缶」(左)と福島県産「トマトジュース」(右)

水産業を震災からの食の復興をミッションとした「東の食の会」がプロデュースし、岩手県の水産業者と協働してつくられた「Ça va?(サヴァ)缶」は、洗練されたデザインと近年のサバ缶人気も手伝って、最近では宮崎県内のスーパーマーケットでも入手する事が可能である。また、カゴメ社は福島県産のトマトを使った「ふくしま産トマトジュース」を生産し、毎年販売している。

これらを被災地において行われたブランディング化の成功例として、取り上げた(写真7)。

「大阪北部地震 @takibata さんのつぶやきから」

企画展準備中の6月18日に、大阪北部地震が発生した。大規模地震災害について考えている受講生達にとっては、このリアルタイムな地震は大きな衝撃であった^(註3)。可能ならばこのジャストタイムの災害状況を展示で扱えないかという事となって、筆者と同じく学芸員養成課程を担当している追手門学院大学の瀧端真理子氏に依頼し、地震直後の氏の研究室や学内の状況の写真やツイートを展示した(写真8)。局地的だった事もあって、同地震被害の状況は九州地方では今一つ知られておらず、また、阪神淡路大震災を経験している近畿地方であっても突然襲ってくる大規模地震に対しては完璧に対応出来る訳ではないという点を改めて理解した。

「復興とは、何だろう」

「心の復興」を主題とした今回の企画展示には、国土の復興(土木・建築的な復興)が果たして被災地の復興過程の終焉なのか、という疑問を投げかける意味合いがある。この観点から、東日本大震災の市民の記録の継承や、大きな被害があった仙台荒浜地区のまちあるきツアーを行っている20世紀アーカイブ仙台の佐藤正実氏に依頼し、震災被災直後と現在を比較出来る記録写真を展示した(写真9)。

仙台市の海岸部にあたる荒浜地区は、伊達政宗の都市計画によって構築された運河による水運が発達し、震災前までその面影が残る街並みがあった。川の水が流れ込む汽水域の海辺には多様な生物が生息していた。また、仙台市民にとって同地区は海水浴で訪れる憩いの空間でもあった。

震災後の復興計画で同地区は居住禁止地区となり、後には火力発電所が建設されている。市民にとっての様々な思い出が残る憩いの場であり、何よりも生活空間であっ



写真 8: 大阪北部地震の写真展示

た海沿いの地区が復興の名目で人々から引き剥がされ、心理的な距離感すら生じつつあると言う。「果たしてこれが、復興なのだろうか」と、荒浜の写真は観る者にそう問いかけてくるのであった。



写真 9: 仙台市荒浜地区をめぐる記録

「復興まちづくりを見据えて」

実際の被災地から離れた場所で、復興とは何かという問いに思いを巡らせるのはなかなか難しい。イメージを喚起する目的で復興過程にある架空の被災地の立体模型を作成し、そこに自分の家を建ててみる、という箱庭イメージのワークショップを用意した。まちの各所にある瓦礫を除去し、さらに将来の災害に備えて自分ならどんな所に生活するのか。津波を警戒して高台に住みたいが、生活の利便性を考えるならばあまり高い所に建ててしまうと不便であったり。そうすると、中間的な場所に建物が集中してしまう。非常にシンプルながら、最も発生しやすい現象を端的に示す結果となった。

東日本大震災以降、大学のある宮崎県延岡市でも南海トラフ地震によって発生すると考えられる津波を警戒して、沿岸部から高台に移住する傾向がある。2000年代に入ってから東九州自動車道の延岡ICが供用開始となり、さらに同道が接続されて宮崎市や大分・北九州市とのアクセスが大変便利になったと同時にそれまで丘陵部であった地区が民間主導で開発されていった。インターチェンジを降りた所に新しい居住地が出来、そこには今も戸建て住居や中規模の商業施設が続々と完成している。また、それまで主体であった沿岸部近くを南北に走る国道10号線沿いの商業集積の開発がピークダウンし、むしろIC近くにある、山間部を経て熊本方面につながる国道218号線周辺での開発が生じている。年間での人口減が1,200人前後という自治体においてこの現象は極めて興味深い(註4、移住の背景の一つとして災害リスクが強く働いている可能性が大きいと考えられるだろう。

また、地震後に受講生が就職活動の関係で大阪を訪れ、その際の様子を自分なりに撮影してきた。この写真についても一部展示した。



写真 10: まちを復興させよう。

4: 終わりに。

この博物館実習のように PBL 型を強く意識して社会の課題解決をテーマとした学修形態は、学芸員養成課程を有しながらも大学博物館を整備していない、特に多くの私立大学においても実施が可能であると考えている。重要なのは、少なくとも地域社会との関係構築が必須であるのは強調しておきたい。本実習の場合も大学以外での学修資源にいかにか受講生がアプローチ出来るかを強く意識している。時にそれは人間関係やコミュニティの複雑な関係性を内包した不可視の社会構造であり、受講生は教員の知る範疇をはるかに越えた、自らがこれまでの人生経験の中で構築してきた人間関係をフルに運用して、様々な情報を収集していく術を身に付けていくのだ。

この文章をまとめている平成 30 年 1 月 3 日に、熊本県和水町を震源とする震度 6 弱の地震が発生した。2016 年の熊本地震とは別の、未知の活断層が震源であると言う。大阪北部地震もそうであったが、比較的近い過去に大きな地震災害が発生した場所からはしばらくは何もないであろうという漠然とした感覚は、もはや遠く失われている。

博物館学芸員養成課程受講生には、熊本地震時に家族や友人といった身近な人々や、子供の頃から馴染みのある施設等が直接被災した経験がある者がここ 3 ケ年度年間で毎年複数名存在した。恐らく今後もしばらくは高等学校や小中学校在学中に被災地で大きな被害を受けたという受講生も出てくるであろうと考えている。間接、そして直接的な被災経験と、増加する大規模災害に関わる様々な情報・課題を受講生自身の視点で理解し・展示として表現していくプロセスを学修した経験は、災害とともに生きなければならない日本で持続可能な社会を構築する一員として自らの役割を意識し、博物館分野のみならず様々な場面で活躍していく人材となっていく事と期待している。

註

1: 御船町恐竜博物館・熊本市プラザ図書館でそれぞれ実施。このインタビュー内容は熊本市プラザ図書館に保存されている。現状では公開に至る様々な処理が済んでいないものの、将来的には被災後の生涯学習施設として博物館・図書館の役割に関わる貴重な記録となると考えている。

2: 平成 30 年 7 月 30 日、愛媛県八幡浜市教育委員会主催の同市旧双岩小学校ワークショップ。本来、この前日に被害の大きかった肱川中流域の大洲町博物館においても同様のワークショップを実施する予定だったが、台風によってフェリーが欠航し、中止となった。従って大洲町の市民も隣接する八幡浜市のワークショップに参加された。豪雨水害からほぼ 1 ヶ月というタイミング、すなわち本文に書いた心のケアが必要になってきた時期にこのワークショップを実施出来たのには、被災者ケアの重要性を認識していた両自治体の教育委員会と愛媛史料ネットの尽力による所が大きい。

3: 平成 29 年度も展示準備期間中に九州北部豪雨が発生している (山内 2018,p.49)。

4: このことに着目した学生達が、以前この博物館実習での展示テーマとして取り上げた事がある (山内 2015,p.18-25)。

参考文献

坂本顕子・岩崎千夏・池澤茉莉・佐々木玄太郎・岡田直幸編 2018 『地震のあとで

熊本地震記録集』 熊本市現代美術館

山内利秋 2015 「平成 26 年度の博物館実習 (学内) における企画展示」『九州保健福祉大学博物館学年報』 4, 九州保健福祉大学学芸員養成課程

山内利秋 2017 「博物館学教育で災害を伝える事ー 2016 年熊本地震を経て、これからの博物館に関わる人材の養成を考えるー」『九州保健福祉大学博物館学年報』 6, 九州保健福祉大学学芸員養成課程

山内利秋 2018 「災害の経過と博物館学教育ー熊本地震から 1 年が経過して、隣接した地域は災害をどの様に考えるべきかー」『九州保健福祉大学博物館学年報』 7, 九州保健福祉大学学芸員養成課程

※なお今回の企画展示にあたっては、次の個人・団体の協力を得た。記して感謝する次第である (50 音順、敬称略)。

F さん一家 (熊本県益城町在住)・瀧端真理子・永島登子・新名史明・野口裕紀子・蒔村令佑・松本涼子

熊本市現代美術館・熊本市動植物園・真如山 妙徳寺・20 世紀アーカイブ仙台・延岡市民協働まちづくりセンター



博物館実習企画展示会場の中央に置かれたモニュメント
「復興」が決して眼に見える構築物の再生だけではなく、様々な対象・存在・要因から成り立っている事を象徴している。